

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可
 昭和五十七年六月十五日 発行 (毎月一回・十五日発行)

(通第三九五号)

慈光

第三十四卷 第六号

次

清水誓一君の最後 近角常観 (1)

聞信雑録 白井成允 (6)

多田鼎先生の句碑 井上善右エ門 (9)

凡骨日誌抄 (14) 西元宗助 (11)

目 一道会の記(終) 榊原徳草 (13)

念仏詩抄 木村無相 (22)

63.9.14
 榊原先生の質問に答へて
 死について

清水誓一君の最後

近 角 常 観

清水誓一君は清水石松氏の養子にして実の甥である、温厚恭謙にして真摯忠実なる実に立派なる人格であった、私は信仰上の友として君との関係を述べて、特に美しき君が最後に於ける信念を君に代りて告白しようと思う。

抑々私が君と相識るに及んだのは今より五年ほど前のことである、石松氏は頗る学生を育てることを好まれて、常に大学及び高等学校に涉りて約二十名の資金を与うるのみならず、衣服居住悉皆之を引受けて世話をせらるるのである、氏の学生を愛することは篤志とか感服とかいうような程度ではない、寧ろ不思議とか奇蹟とでも言わねばならぬ次第である、沢山の学生と雑然居住して怡々として楽しむ有様は、氏が所謂衆生縁の深きに驚かざるを得ぬ。

氏亦信心に熱心なる、煩劇なる蟻蝨町にありながら、常に聞法と称名は絶え間がない。氏が人の世話をせらるるも勿論この信仰と深き関係のあることは言うまでもない、そこで此等の同居の学生に向つて毎夕勤行の時、せめて御文

今更の如く同情に堪えざらしむるものがある。

君が大崎に住せらるるに及んで距離が遠くなりたるため学舎へは来られななだが、村松町に於ける石松氏宅の講話には必ず出席せられた、如何なる時でも君を見ざる時はなかった、しかし何となく勢なく見えたのは今から思えば病気のせいであつたのであろうが、所謂蔭が薄かつた。

君は実に道を求め、道を求めて而して得られぬに困られた、自ら求めて得るのではない、如來廻向である、如來より与えらるのであると云えば、しからば一体どうするのであるかと云わるのである、我が読者中には此種の方が少からぬことを覚知する私は少からぬ同情に堪えられない。

あまり求めて得られぬので、遂に疲れた気味であつた、失望、絶望という嘆があつたのであろう、しかしそうとも言わず、いつもの真面目な態度で一点の余裕なく聴聞せらるるのであつた、病気とも知らず、それとも知らぬ私は、かくして最後まで至つたのである。

一日奥様が来られて誓一君の病篤きことを語られた時は本当に寝耳に水であつた、石松氏宅に來りて静養せらるるようになったが、求道に疲れたる君は病の進みつつあるにも拘らず、一向聞法の希望が出ぬらしい、石松氏や奥様は聞かしたくて致方なくなつた。そこで石松氏は誓一君に向つて云わらるるには、我家は代々真宗信者として後生の一大

だけなりとも聴聞して呉れというのが氏の頼みであつた。そこで此等の学生に聞かせんがために、氏及び其一家は勿論、知人近隣の人を集めて一月に一度法話を開かれた。そして私が其の請に應じて参るようになったのが抑々御縁の始である。

氏が、下谷初音町の岡倉邸に寓して学生と共に同居せられたるとき初めて参りたのであるが、誓一君は最も熱心なる其の時の聴者であつた、講話のあとに必ず深く質問せられたり、又対話するのが例であつた。それから久しく求道学舎へ熱心に來聴せられた。

君が求道の苦心は実に察すべきである。真面目の氣風の青年諸君によく見ることであるが、真摯懇実なる態度を以て是非信仰を得たいと求むるのである。あせるのである、あせればあせる程、得られぬのである。いつでも不安なる不審なる合点ゆかぬという態度で、しかも真面目に恭謙に質問せられたことを想起するときは、当時君が苦心の程も

事が何より大切である。万が一にもおまえを仏壇から地獄へ落とすようなことあつては、親先祖に向つて我が済まぬことになるが、おまえは安心が出来て居るか尋ねられた、すると誓一君は深く感じて是非一度私に來て貰いたい、聞きたいとの事であつた。即ち其の夜直ちに私は病床に彼を見舞うたのである。

真面目なる君は癩せかれたる体軀をもたげて会釈をするのである。私は之を制して枕に近づけば、君は従來求道苦心の跡を述べて、且つ近來病の進めること、身体の勝れざること語り、夫は夫として置きてと言を切りて、石松氏の仏壇から地獄へ落してはならぬと云われたに深く感じて、病床をも顧みず御出でを願うたと云われた。

そこで私が申すには夫は夫として置きてではない、病が重ければ必ずあなたも色々心配でありましょう、人間というものは、かく病気になるときは親の力でも妻子の力でも致方なく、其心淋しい胸の中を唯一人察して呉れるものはなく、此方より此胸の中を開くことは出来ぬ、又人間は死ということを考えると先は真の闇で、実に時間も空間も考へることが出来ぬ、かく淋しき胸の中、行く先の真の闇を深く察して飽くまで憐みて、必ずく助けねばならぬという大慈大悲の御親心である。

今日まで喜びたい、信仰を得たい、安心したい、助かり

たいというようにのみあせつて居られたのであろう、どうしても喜ばれぬ、信仰が得られぬ、安心が出来ぬ、助からぬ、であろう、其助からぬものが可哀相じや、喜ばれぬものが憐れじや、夫を見捨てぬのじや、深く察するぞ、飽くまで助けおせねばならぬという、やるせなき弘誓の御力であると申しした。

すると忽ち、ああ有り難い、方角を間違えておりました。喜ばれぬのを可哀相じやと云うて下さるのを、喜ばうとあせつてばかりおりました、アア喜ばれぬを憐んで下さる、アア方角を間違えておりました、分かりました、有り難うと申された。

これが歎異抄の第九章でありますよ、天に踊り地に躍るほどに喜ぶべきことを喜ばれぬのは煩惱の所為である。其煩惱のために喜ばれぬを、かねてしろしめして喜ばれぬものと仰せられたのである。又いそぎ浄土へまいりたき心と心細くおぼゆるも、かねてしろしめしていそぎまいりたき心のなきものを特に憐れみたまうのであると申しした。

長々方角を間違えておりましたと繰返えされた。汽車の橋を通りて枕木の間より滔々と流るる水を臨むときは、誰でも目も廻らんばかりに身慄いをして恐ろしきは当然である、其恐ろしいのが可哀相と思召して、決して落

身なりと申したところが、涙を浮べてよくの御因縁でありました、と心の底から喜ばれた、嗚呼五年の長き間は今日あるがためなりしか、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。

本月二日第三求道会の時危篤の病人が車に乗りて参詣したいというのである。夫なればというので帰途に立ち寄った、するとその嬉しげな様子といかにも晴ればれしたる信樂とは、周囲のものまで気が晴れる位である、とても瀕死の病人とは思えぬ、信仰に入りたれば喜が溢れるのである、気が楽々となるであろうと思つておりましたが、果してその通りになりました、何時如何にならうとも少しも心配はありませんと申された、如何にも晴れした様子が文類正信偈の御文を想起せしめた、必ず無上浄信の暁に至りぬれば、三有生の雲晴れ、清浄無碍光耀朗かに、一如法界真身顯るとは此事じや。

数日経て深夜講話の帰路に立寄りて、先日の喜びにつきて右の御話をした、然るに此度は亦反対にイヤイヤ中中駄目であります、先日も一鍋の飯を食いたる人が階下にありて話声がするから、帰りに立ち寄りて呉れるかと思つていました、しかるに其儘かえりて仕舞いました、そこで一寸見舞いにくれても、よさそうなものじやと不足に思いました、暫くして思い出して見れば、今日までに私がドレ程其人のために親切にしたか、其人が入学試験のために随分苦

とさぬぞと襟元を捕えて下さるのが御慈悲の手である、恐ろしいは恐ろしいが、かくまでたしかなる御手なれば、行く先も何が何やら分らねども闇も苦勞も氣にならぬ、念仏はまことに浄土に生るるたねにてやはんべるらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん、総じて存知せざるなり、たとひ法然聖人にすかされまいらせて念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候と仰せられたは、此所である。

かく喜ばれぬものを憐み、助からぬものを助けねばならぬの仰せなれば、喜ばれぬにて往生は一定である、いそぎまいりたきころなきにつけて往生は決定でありますと、私も誓一君と共に深くいただかしてもらいました。

誓一君は喜ばれぬが苦になりませぬ、何時に如何様のことありても心配はありません、南無阿弥陀仏と、手離しの安心があらわれて下された、独りだちの自督があらわれて下さった。

親父が仏壇から地獄へ落としてはならぬと言われたのが、即ち仏様の御思召である。本願の御呼声のままである、此度かく頂かれたのも全く如来様の深き御因縁である、私が数年前からお宅へ伺つたのも今日の事のためであつた、嗚呼遇々行信を獲ば遠く宿縁を喜べ、中中一通りの因縁ではありません、多生曠劫この世まで、あわれみかむれるこの

魂

勞をしていたときも少しも同情をせなんだ、其人が入学したときも、少しも共に喜びて上げた事はないではないか、我身のことを善いもののように思つていたが皆駄目じや、私は罪ばかりじや、罪の深いのが眼に見えるようである、それを憐みて御助け下さる仏様の御慈悲ばかりが有り難い、と、如何にも罪深いことを懺悔さるるので、かくまで我機を知らせて下さるかと驚くばかりじや、我等は瀕死の人ほど眼の当り悪さを感じることが出来ぬ。人は死が眼前にあらわるととき程、透徹したる有様はない、実に我等は罪の魂である、南無阿弥陀仏。

その時私が若松求道会へ出立する前であつた、親父が申さるるには先生は十五日朝でなければかえられぬのである、人間は何時かわからぬのであるから万が一にもモ一度承りたいというようなことがありては残念じやが、モ先生にお目にかかれぬともさらに不審のなきまで安心が出来たかと尋ねられた、モハヤ少しも承ることは御座りませぬ、さらに心配はありません、御慈悲ばかりがありがとうございましてと申された、それでは先生、夜も遅くなりましたからと石松氏が申された、随分多くの人の臨終に御話をしたけれども、かほど遠慮なく、病人に申されたこともないが、またかくまでも明瞭な返答をせられた人はない、私は合掌して御別れをして、御縁があればまた遇いまししようと挨拶

をして階を下りるとき、頭をさし延べて私の後姿を見えぬようになるまで涙を泣いて見守って居られた姿が、今猶髣髴として眼底に残りてある、嗚呼実には私の誓一君に対する今生の最後の別れであった。南無阿弥陀仏。

其後毎日々々石松氏やら奥様から歎異抄を読み貰うて有り難い／＼と非常に喜ばれた、特に第九章を読むと心から嬉しうであつたとの事である。他の所であると黙して聞いている居るが、多少不機嫌である、よむ所は第一章第二章第九章だけであつた、特に第九章になると様子をかえて喜ばれたさうである。

不徳なる私を非常に慕われて、待つて居られた、十五日朝になるとモ一度御遇い出来るが、とても夫までは駄目であらうと申された、親父がナニか尋ねたいことでもあるかと申されたれば、尋ねることはなにもなければ、何遍にても御遇いしたいばかりじゃと言われた、十四日朝高声で三十遍程念仏せられたら、はや事切れておられた、アア今頃は極楽で待つて居て下さることであらう南無阿弥陀仏。

遺言として親父に申さるるには、自分が死んだら香典は、そつくり求道会館の寄附金に上げて下さい。そして其代りに皆様に雑誌を一冊づつさし上げて下さい、そして皆様が同じ御慈悲をいただき下さるようにして下さい、頼みます／＼と申された、親父に申されたので足らぬと思われた

聞信雑録

「如来世に興出したまう所以は、唯だ彌陀の本願海を説かんとなり。是れ正信偈の御語である。

「私共の世に生れ出た目的は、唯だ彌陀の本願海を聴きまつらう、とである。」

是れ故普瀬芳英師が正信偈のかの御語の軸を拝されつつ述べられた言葉である。まことに「人生の目的」について諸多の教はあるけれども、私にとりて究極真実なるは唯この御教のみである。

二

盛岡の御同行が次のような物語を聞かせて下さった。

或人が修道の志を立てて精進せむがために、朝夕己が心を省みて、若し汚れた念が起ると室の床柱に一本の釘を打ちつけ、そしてその汚れた念が復た起らないようになればその釘を抜き去り、このように工夫をこらして専心に勵んでいった。初のうちは日々打ちつける釘が増していつて遂

ものか、店の方を二人まで呼びて夫を遺言された、かくまで会館のために心配して下さいか、南無阿弥陀仏。

且つ誓一君の思召は此等の御厚意の親しき方々に、どうか同様に御慈悲を頂きて貰いたい、社会の全体の人々にも是非之をいただき貰いたい、此文章は私が書いたのではない、誓一君が私をして書かしたのじゃ、何卒此文を読まれん方々は、誓一君の深重なる御心をいただき下さい、書いて居る私は会館でも、雑誌でも、懈怠勝で申訳がありません、ここにつつしみて誓一君の親しき方々の厚き御志を悉く御受けをいたしました。深く／＼感謝をいたします。どうぞ皆様も誓一君の思召の如く、この雑誌を熟読して下さい、誓一君と同じ信仰に入りて、同じ妙果を得て下さい、皆様がこの雑誌を手にして一遍の御称名をせられたならば、御浄土から見られる誓一君は如何に満足せらるるであらうか、南無阿弥陀仏。

求道第十巻・第八号より



白井成允

に柱いっぱい釘になつてしまつた。しかもその人は克己して独りを慎しみ、うまずたゆまぬ努力をしてやがて一つ宛の邪念を断ち、一本宛その釘を抜き去り得るようになった。かくしてとう／＼終の日がきた。終の釘が抜かれた。

然しこの時、彼はさめざめと泣いたという。

泣いたのは、初一念を貫き得た喜びの涙というやうな甘美なものではなかつた。彼はいかにも釘を抜き去ることは出来た、けれども釘痕を埋めることは出来なかつた、柱一面は彼の邪念の痕に刻まれて汚されてしまつていた。彼はここに始めて己の本性を如何に清めても遂に清め尽し得ないことを知つたのである。永年の努力はこの無念の涙を生んだのである。

吾等は罪を悔いることがある。然し、悔いても／＼既に一度犯した罪はまた消えず、その時その場合の想出はいつまでも苦しいではないか、釘が抜かれても釘痕が残るやうに。——然るにその釘痕からこそかえつてさんらんたる光

躍が照り映える不可思議の消息を私はお聞かせにあずかっているの感謝せずには居られない。曇鸞大士和讃に、

無碍光の利益より、威徳広大の信をえて

かならず煩惱の水とけ すなわち菩提の水となる

罪障功徳と体となる 氷と水のごとくに

氷多きに水多し さはりおおきに徳多し

三

後悔ということは殊勝な徳のようにも思われる、然しそれは愚痴の煩惱のわざである。ここには己れのありのままのすがたがまだ見出されていない、己れを己れ以上の者として買いかぶっている。あの時にああしたらよかつたのとか、こうしたならばと後悔しているのは、実は愚痴をこぼしているのである、ああもこうもできる身ではなかつた、そしてその時に私が為したことより他には為し得なかつた身であつたのだ、と私の如実の相が見えずに居るのである。もし如実の相を見るならば、後悔の念は懺悔の心に転ずるのである。後悔は煩惱の業であるのに、懺悔はかかる煩惱が仏の絶対力に救済された時に自然におこる心である。

歎異抄の第二章を読むごとに私はこの区別をはっきりと知らせていただく。「念仏はまことに浄土に生るるたねにてやはんべらん、また地獄に墮つべき業にてやはんべらん、総じてもて存知せざるなり」と云い、また「いずれの

五

仏教に小乗大乘の別があると云われる。そして小乗とは自分一人のさとりを目的とし、大乘は自分ばかりでなく一切衆生を同一のさとりに導く教であるといわれる。そして此の別に執して私達は小乗を軽んじ侮り、自ら大乘の教徒であると誇ろうとする。

然し自分がさとらずして如何にして能く一切衆生のさとりを証することができよう、小乗の修行も能くし得ない身が自ら大乘を誇りとするは身の程を知らぬ驕慢である。小乗も人格発展の道程において過ぎねばならぬ必然の場である。敬うべく慎むべきである。

——これも前田和上の教えである。

六

仏が彌陀という固有名稱でよばれ、浄土が西方にあると限定せられた所に私はあるがたい情感を持つ。

神といつても、愛といつても、力といつても、誠といつても、名は何といつてもかまわない、唯それに即する情熱さえあれば、という考え方もあるが、然し私は単に「父」という觀念よりも「私の父」という觀念に生かされる、私の父の名を聞けば特殊の感じが起る。固有の御名を持たせられた仏様、その御名を想い起すとき親しきは格別である。然もその御名はその本質をあらわしている。そしてその御

行も及び難き身なればとて地獄は一定すみかぞかし」という痛ましい深い御懺悔の中には「たとい法然上人にすかされまいらせて念仏して地獄におちたりともさらに後悔すべからず候」という悠々たる心境が含まれていることとつけたまわる。

ちなみに記す、此処に「後悔すべからず候」といって、「後悔なし」とか「せず」とか言われなかつたところに、(同章の終に近く「親鸞が申す旨またもてむなしかるべからず候か」といわれた「か」の一字と同様に)私は祖聖の限りない敬念に触れまつる想いがして尊いことである。

四

前田和上は私に境界ということを教えて下された。境界とは、今の言葉に翻せば世界といつてよいだろう。人の其処に住んでいる世界、私の心が其処に止まっている場所である。

ヒマラヤの麓の森の奥に修行を積んで幾年を経た者が、復た世間に出てくると市巷は人間臭くて耐えられないということである。生れながら人間臭い中に住んでいる者は彼の住する境界の故にその臭さを知らずに居る。獣を屠つて食べたり何かしている者が涅槃の風光を証するなどと云うことは、できるわけのものではなからう。白い髻をなでながらこう言われた和上の御姿が今も浮んでくる。

本質は悪人救済の大慈悲にたましますのである。

曇鸞大士の和讃に「世俗の君子幸臨し、勅して浄土の故を問う、十方仏国浄土なり、何によりてか西にある。鸞師答えてのたまわく、わが身は知慧あさくして、いまだ地位にいらざれば、念力ひとしく及ばれず」とある。同時に西は衆婦の義をあらわすのである。日は東に昇りて西に入る、静夜天を仰げば、月も星もひとしく西に向う、かくて萬象ごとごとく西に向つて帰るを見ては、自分の帰る処も西にあると示されるのと想い合はれて限りなく懐しき親しさを覚えると言つてくれた友がある。

彌陀仏も西にましますのである。釈尊も西より生れて西に還りたまつたのである。諸菩薩、諸師も西に往き給うたのである。恩愛のちまたに想出深き誰れ彼れも今は西に住いたまうのである、私の往かしめられる世界もやはり其処なのであると知られるとき、しみじみとした懐しき、慰めに潤う心地がする。

此の如きは凡情のゆらめきであつて何等理性的な消息ではないなどと人は言うでもあろう。然し私はこの凡情のゆらめきに即してさながらに無量甚深の世界を現わして下されたまいし御苦勞を唯事ならず想う。誠に一々の凡情を如来は一々転化しそれに即して私をお救い下さるのである。

多田鼎先生の句碑

井上 善右エ門

安城の山本博雄氏が五月五日に古稀を迎えられました。それを機に古稀の法会を御自宅で開かれ、合せて多田鼎先生によって発足した聞信会が創立五十周年を迎えるのを記念して、句碑一基を庭前に建立され、その除幕式が執り行われました。

山本博雄さんは多田鼎先生の薫陶のもとに念仏者となられたお方であり、御自宅の一棟を聞信庵と名づけ、聞法道場として有縁の方々に提供され、多田先生の御命日に因んで七日会を毎月同庵で開いておられます。その七日会が三百回を重ねた記念のお企でもありました。

昭和三十九年、私は先師白井成允先生のお伴をして多田先生の遺徳を偲ぶ会（昭和廿八年先生の十七回忌に始まる）に参会させていただいて以来、山本さんに法契としての御厚誼を蒙っております。

それで此度の法会にお招きをいただいたのでありますが、それによると午前は名古屋の岸本鎌一博士の御法話、午後

は小生にとの仰せ、私はかねがね岸本先生に拝眉をえて、親しくお話を承りたいと念願していましたので、時節到来と勇躍してお受けし、五月五日早朝神戸を発ち、安城駅に大須賀夫人のお出迎えをうけ、十時少し前山本さんのお宅に着きました。ところが岸本先生はインド旅行以来、健康を害され御出講不可能との由で、これには大いに落胆しましたが、代って谷大名誉教授の藤原幸章先生がお話し下さる事になっていました。

予定通り十時より句碑除幕、多田先生の「峠一つ越ゆれば春の浦長し」と太田力師の「一人居て二人と思えば冬温し」の二句が緑色鮮かな自然石に刻まれております。その句前に山本博雄さんが表白文を読まれ、続いて聞信庵の祖師画像の御前に参会者約百二、三十名が声高らかに正信心仏偈を勤行、そして藤原幸章先生の御法話を承りました。期待していた岸本先生のお話を承りえなかつたのも御縁次第の出来事、今まだ思いがけなくも藤原先生の御法話を始

めて承りえたのもまた御縁の然らしむるところであります。お昼は山本氏御家族の御厚志の中食を参会者一同頂戴し、午後は「人より仏へ」「仏より人へ」と二座に分けてふつつかなお話を私が申上げ、午後四時五月晴れの一日の法会は滞りなく終了、山本さん御一家の厚意を謝して一同解散しました。因にこの日は遠く富山・滋賀・岐阜からの参会者があられた事は驚きでした。

さて多田先生の句碑の御前に山本さんが表白文を読まれたのでありますが、「峠一つ越ゆれば春の浦長し」の句につき、「御一代記聞書」の「我が心にまかせずして心を責めよ、仏法は心のつまるものかと思えば、信心に御慰み候ふ」の一節を引いて所懐を語られました。多田先生が真実を求めて、どこまでも我が心を追求された道程は実に激しく厳しいものであった事は、私も学生の頃先生のお話を承る度毎に感じたところでありました。寸隙の邪念を許さぬ自省の鋭さ、それは先生にとってもさぞや悲痛な自己追跡の道であられたでありましょう。しかもそれが自責の苦に始終するのではなく、やがて必ず転じて大悲のみ胸に撰取されるよるこびに帰着された趣きが、登りつめた峠の前に開かれる春の海の悠然として浦長くつゞく駑蕩たる情景として映じたことでありましょう。多田先生の念仏の人格を偲ぶと、その御一生が、かゝる緊張と安堵の相続であられ

たように拝察されるのであります。

またこの句を拝見していると、私にはさらに今一つの思いが湧くのであります。それは先生の骨身をけずる求道と、その末に体達された至心信樂已れを忘れる信心開発の一念の到来であります。峠に立って眼前に開ける春の海の寂けさ、明るさ、そして安らかさに満ちたよろこびと感動の御体験です。こゝに私は白井成允先生の「一もとの黄金の條の海原を走り流れて日は出でにけり」と詠じられた御心と思ひ合わせて感慨尽きぬものがありました。

よき師に遇うということは、何という幸慶でありましょう。法は人なり、人は法なり、かくて遺弟の念力が仏の正道たる念仏の大道を永遠に相続し発展せしめる事であります。これ法が人を動かす奇しくも尊い事実であります。山本博雄さんが多田鼎先生の念仏の人格を通じ、その法に働かしめられておられる尊厳なる現実のお姿である事を深く感じたのであります。（五月六日誌す）



凡骨日誌抄 (14)

— 唯除の身 —

西元 宗助

わたしどもを真に助け遂ぐる往生成仏の御本願は、大無量壽經の第十八願に極まる、ところでその大悲の十八願は、「たとい、われ仏を得たらんに、十方の衆生、至心信樂して、わが國に生ぜんとおもつて乃至十念せん、もし生ぜずば正覺をとらじ、」とあつて最後に「唯だ五逆と誹謗正法とを除く」のお言葉がございます。しかも、この唯除のお言葉は、大經下巻の頭初の十八願成就にも嚴として附加されていきます。その全文を、こんどは漢文のままいただいてみます。

諸有衆生、聞其名號、信心歡喜乃至一念、至心廻向、願生彼國、即得往生、住不退轉、唯除五逆誹謗正法。

この唯除のお言葉を、朝に夕に、今、わが身にいただいて切実に知らされること、それは五逆とは誹謗正法とは、すべてわが身のことでありました。まことに唯除とは、わが身のことでありました。省みれば、修諸功德の十九願も、殊に至心廻向の二十願も、このことを真に徹底して自照せ

しめんがため的大悲でありました。そしてここに徹して貫いて泌みとおるもの、即ち、この「救われぬ身に泌みとおる」ものこそが、「み名の聲」でありました。まことに名號こそは、この唯除のものを、無底の地獄行きものを、救わずんばおかぬという大悲の呼び聲でありました。まことに名號の名というは、無明の長夜における大悲の本願の「名乗り」であります。名號の號とは、汝を助け救わずにはおかぬという如来招喚の「呼び聲」であります。大字典をひいてみると、號令、號泣というように、號とは大聲をはりあげて衆生を呼び、衆生に叫ぶ、大悲の音聲であります。

まことに至心に廻向し給える本願の名號を聞信する、その聞其名號、信心歡喜乃至一念のほかに、如来よりたまわる大信心はございません。

誌友の皆々様、まことに有難いことでございます。如来の大悲心は、つねに聞不具足な、信不具足な、自力の執心

のなくたらない、どこまでも不徹底な、つねに五逆誹謗正法でしかありえない、まことに悲泣すべき罪業深重の宿業深き身においてこそ、果遂の誓い、まことに由あるかな、若不生者の誓い、まことに由あるかな。自然に自らにして、われらの身に徹底し給うのでございます。南無阿弥陀仏。足利浄円先生の二十二回忌並びに今田彰夫法兄の二十五回忌を迎えるにあたり、御恩徳を謝して、この小文をしるし奉る。

なお、浄円先生の御生前のあるとき承ったこと、それは先生が実質的には還俗なさつて同朋舎印刷所を始められた大正十五年の翌年、全国水平社（現在の部落解放同盟の前身）が結成されるにさいし、その広告の宣伝ビラ等を、どこかの印刷所も引受けたい。それで同朋舎で引受けたいところ、川端警察署からは呼び出されて取調べをうける、尾行はつくで、一時は困った旨を打ち明けられ、センセイ、ご苦労さまであるが、御同朋の立場でおよろしくと仰せいただいたことがあります。その全国水平社は本年の三月三日で、創立六十周年を迎えたと聞く。念のため、当時の資料を調べてみると、「印刷所・丸太町川端東並・同朋舎」と掲載されているのを見つけて、感無量でありました。（渡辺秋定篇「部落問題・水平社運動資料集成」第一巻二四ページ）例によって、愛唱の栄一さんの詩を一つ。

罪悪深重

私はこんにちまで

海の大地の

無数の生きものを食べてきた

私のつみのふかさは

底しれず

うつるとは月もおもはず、うつすとは水もおもはぬ
沢の池

数年前京都に行きました時、西元様の御はからいで、今も昔の面影の残っている処へ案内すると云われて、宮地彰雄さんの車で洛西の広沢の池に案内されました。その時、旧制一高の校長だった新渡戸稲造先生が「この歌のような友情が理想的である」と学生によく語られたことを思い出し、今も心に深くきざまれております。（花田）

一道会の記(終)

榊原徳草

花田先生の宗教的同朋の御法話が終って、ここで一同はお茶を頂いて心身の緊張を和らげ、法雨に浴した温か味にひたるのであります。それから、長崎の平岡さんにお願ひして、花田先生に何か質問して頂き、その答えを願うことになりました。平岡さんの質問は次の通りであります。

こちらにマイクがありますので、坐ったままで此所からお尋ねします。私長崎から来た平岡であります、大分前からこの会にお世話になっております。特に花田先生の慈光誌はずっと前から拝見させて頂いています。それから榊原先生にも偶然の御縁から長崎でお世話になって居ります。先程何か話せということでありましたが、私などが申上げることがありませんので、質問をさせていただきます。質問と申しますについては、私がこういう聞法に御縁を頂きましたことについてお話し申したいと思ひます。

私、京都は非常に懐かしい所であります。昭和の始めに

京都で数年暮らしました。そして長崎に参りましてから四十五年程になるのですが、学生時代はこれということも無かつたのですが、社会に出て会社務めを始めましてから何となく人間関係がしつくりゆかない。振り返ってみますと、やはりそういう所に御縁を結ばれる所のもので、今にして見れば、そういう事が口から簡単に出来ますが、私としては氣でも狂つてしまふんじゃないか、とそういうような経験を致しました。然し幸いにして、しかも非常に廻り道をして、始めて長崎で或る人師にお会いしまして、どうやらこうして健康に、そして自分の暮しをしている次第でございます。

本當に考えて見ますと、そういう好き人に恵まれ、又今日こうして諸先生に御教えをいただくことが出来ることを静かに考えてみますと、私本當にこれでよかつた。そのきっかけは何度か長崎を飛び出そうとしましたが、妙なことで、その地獄のような長崎で四年間辛抱せざるを得ない、してありますことは、自分自身健康であつて病氣したくない。それから家族の中に問題が起ると矢張り心配、そういうことが無いようになつて欲しい、借金に苦しめられるということもあつてほしくない、こういうことは厭わしいことである。又自分が頼りにしている者には、別れたくない、これが唯一の頼りだ、そういうものが矢張り我々の中に現実に押し迫つた生活を續けて居る私だと思ひます。

それで数年来、花田先生の慈光誌を拝読して居りますと、生死が一つだと、こういうことを最近よく御伺いするのでございます。で、死ということが私の年にもなりますと、そろそろどころではなくて、明日知れぬ問題でございます。

で今申しましたような、普通我々が感じる所の不如意なこと、いやなこと、好ましくないこと、これは毎日あります。これは皆様も直接経験されることと思ひます。その中に法に生きる道を摸索し、いただいて居るんだと思ひます。最後は迫ってくる生と死、死の問題、そういう死の問題は何か私にとってはまた新しい問題ではないか。いざ死の問題に直面した時に、噫、自分は何を聞いておつたのかと、そういうことにならないことが望ましいのであります。例えて言えば、此処で忽然としてお前は不治な癌であると云われる、その時に皆さん自信がおありですか。明日も判らない死に迫られたとき、そのとき皆さんどうされますか。

そういう立場にありましたが、そういう所に近角常観先生に教えを頂いた方から救いあげられたと申しますか、今日あるわけでございます。そういう間に結局我々は自分の好む所と不馴な^{ふな}こと、そういう風なもの織りなす中で暮して居るのでございますが、御縁を頂く前というものはすべてが不如意の連続でございます。何ともしがたい毎日でございます。しかし御縁を頂いた後もそれはちつとも違ひません。けれども息ぬきができる。これは矢張り私自身が持った所のものへ何とも云えない私の生きる力と申しますか、仏御自身によつて何とかおぼつかない足どりで毎日の生活をさせて頂いて居ります。そういう風にしてやっていますが、自分で自分の好きなことは本當に嬉しいのですが、そうでないことが起るといふと、又まつ闇になつてしまふ、そういうことで何とか暮らさせていただいて居ります。結局すべてが我執で、それが名利であります。

私の先生は私のことを何も言わない、只一つ言う、人に良く思われたい、それから損をしたくない、そういうことで何も仰しやらない、名利ですなあ、尽きるところはそれなんです。其時は教えはよく解らなかつた。その先生が亡くなられて十年近くになりますが、色々仰しやつたことが憶い出されるんです。

ここで伺ひたいのですが、腹の中に依然と

大丈夫でしょうか、私は大丈夫とも何とも云えないんです。そこがかねがね伺って居ります先生の生死は一つだということについてお伺いしたいと思います。

今生死の問題をお尋ねなされたのですが、人生において善悪の問題と生死の問題、これが大きな問題であります。

私自身二十四才の秋始めて善悪の問題に行き詰りましたとき、歎異鈔の「さるべき業縁の催おせば、いかなる振舞をもすべき」この聖人の御言葉が非常に自分の身になって下さる、何とも云えない感じを御教えとして感じました。これが善悪問題について私が聞いた「さるべき業縁の催さば」の御言葉であります。これが私への光りであります、これが善悪問題解決のヒントでありました。

こゝで一才「さるべき業縁」ということを申し上げておきますが、池山先生が岡山高等学校をおやめになつて甲南高等学校へ御移りになる時、縁のある者だけが送別会を開いたのであります。すると先生はその席で、君がたは自分のような者を信用してよく御話を聞いて下された、然しこれから君達と別れて甲南高等学校へ行くが、業縁次第ではどんな業縁わざづらするかわからない、然しそうした業ざらしをしたとき、世間の人は皆あきれてしまふだろう、池山とはあんな奴かと思ふだらうが、聖人が「さるべき業縁の催おさ

あきさんも、例の親殺しの阿闍世が仏の真実に気づいて念仏に帰したように、いつ帰ってくるかわからない。こうなつてくれれば阿闍世が自分達の好き善知識になつて下さる。あきさんも自分達の先達としてまた尊ぶようになるかわからない、その可能性はある。そういうことを言われて、ただ念仏の上から、あの人は悪いと、自分は別人となることはできないのだと言われましたが、世間の冷たい批判の中にあつて先生の善悪問題のこのお話を聞かれたら、あきさんも救われるだらうと思ひました。そして、私共が歎異鈔の親鸞聖人の御言葉を自分の言葉として味わうようになれば、世間を見る目は変わってくるだろうと、こういうことを言われました。これが善悪問題について徹底した歎異鈔第十三章の宿業の解決だと思ふのであります。然し善悪ではいつも失敗ばかりやります。それについてこの書院の御内仏の両脇に掛けてあります「唯仏一道独清閑」「念仏者は無碍の一道なり」の軸、これは近角常音先生に書いて頂いたのであります。この先生が念仏の上から、やりそこないが止まるんぢやないのだ、それをいつもやるんだ、それではいかんだ、しかしそれが可愛想だと言つて下さる御方が有るのだ。こゝにやりそこなつては引き戻され、やりそこなつては引き戻され、これが死ぬ迄続くのだ。そう言われました。以上は善悪問題であります。

ばいかなる振舞をもすべし」内に八万四千の煩惱を持つて居ればどういふ業ごうご曝ばくしをするか、罪悪に対する免疫性は無いのだ、こゝ迄聖人がよく知つて下さる。こう仰しやる聖人だけは、世間の人は皆捨てようとも、聖人だけは、どこ迄も御一緒して下さい。こういうことを御別れの時の挨拶で申されました。その後私は京都の方へ参り、先生も大谷大学の先生になられました。丁度その頃に例の藤原義江さんの所に走つた藤原あきさん、(テレビ塔総裁と云つて、テレビに出て参議院に最高得点で当選した)、当時御主人は東大医学部に勤務し、子供も二人あつたのです。その夫と子供を捨て、藤原義江さんの所へ走つた。その当時の新聞や雑誌は皆「人で無し」と叫び随分非難があつた。これを池山先生は私に示されて、成程藤原あきさんのやつたことは悪い、悪いけれども、念仏の上からあの人は悪い自分は善いとあぐらをかいて居れない。この人と共通点がある、第一の共通点は藤原あきさんも八万四千の煩惱を持つて居る、池山も八万四千の煩惱を持つて居る、ただそういうひどいことをしないのは、そういう業縁が無いだけだ、業縁があればどういふひどいことをやるかわからない。今一つ共通点はどんなに悪かろうが善かろうが、仏様の御目から見れば皆可愛い一人子だ、同じ兄弟だ、共に煩惱具足であり共に同じ親を持つ。これが共通点である。更に藤原

さて、お尋ねの死の問題であります。

私が始めて死を知つたのは、私が小学校の時に、五才になる妹が池に落ちて死にました。隣の町に祭りがあり、行こうとすると妹が連れて行けという、邪魔になるのでいやだと言う。母が「妹をつかまえているから裏から早く行け」という。それでソツと行つたんです。御馳走になつていと、使いが来て直ぐ帰つて来い、妹が死んだという、飛んで帰つて死体に触れた時に、氷のように冷めたい。この妹の死によつて心に深く感じ深く刻まれたのは「死」でありました。その後、中学三年の時に春、兄が二十才で死に、その秋に姉が二人の子を残して死にました。これによつて今度は私が死ぬのだと、兄姉二人が一年間に死にましたので死が問題になってきました。自分が死んだらどうなるだらうかということが問題となつた。

高等学校に入り、割合に近づき易いキリスト教の聖書を読んでいきましたが、それにしても天国は、死後は、どうなるのか、これが問題となり、冬休みに国に帰つて、人間はぬくぬくと着て、腹一杯たべているから横着になるのだ、飢えが迫り寒さが強くなつたら本音を吐くだらう、そう思ひ聖書を持って、寒い日に一人山に入り、死んだらどうなると試みましたが、結局、孔子の言う如く「生の従来する所を知らず、安んぞ死を知らんや」で、障子の向うさえわ

からぬ奴に、死後のことが解る筈がない、わからないといふことが、わかっているのであります。解からないといふこと、死んだら終いとは違います。

その後、科学の方に一生懸命になり、人の生命も、ロソクの消えるのと同じじゃないか、それで「無の見」に落ちました。どうも科学からみれば死んだら終いだ、こうした気持で居りました時に、私の父が死にました。父の死によつて、死んだら終いと言えなくなつた。どこか父さんは居るとしか思えません、無の見におちた私をして父の死は引き戻してくれました。然も依然として死の問題は解けませんでした。丁度その時私は医大の三年でした、友達陶山君が急に病気で死にました。北村教授が、その二三日前に、陶山君も、もう時間の問題だ、お別れに行かうと言われましたので先生と一緒に病室に這入りますと、一番に先生に向つて、三年間、一生懸命に先生に教えて頂いて、何の役にも立たずに死んでゆかねばなりません、こうお詫びをし、御両親には卒業したら楽になつてもらおうと思つたのにと、そして私共に向つては、僕は医者になつて人の病気を治そうと思つたが自分が死ぬとは知らなんだ。これが最後の叫びでした。

こういう陶山君に誰も慰める言葉がなかつた。教授が注射しようかと言つと、陶山君は、イエ先生に教えて頂いて

時です、突然血尿がたまはして驚いて市大の岡教授にかかつて診てもらいました、すると膀胱癌だから入院して手術せねばならぬことになりました。入院しました時に、隣の部屋で泣いて居つた子供が泣き止んでから小さい棺に入れられて運び出される。夜中にお婆ちゃん／＼と叫ぶ声が隣の部屋から響く、看護婦や医師がバタ／＼走る、静かになつたと思つとその部屋は空き部屋になつてしまふ。こういうことから、年は六十五だし重病だし、始めて自分の死の顔が現われ、自分の死が前になつた時に、人間の言葉も通じなくなつて了う。この時に唯一つ、私の力になつて下さつたのが歎異鈔の第九章であります。「久遠劫より流転せる苦惱の旧里は捨て難くいまだ生れざる安養の浄土は恋しからず候こと、よくよく煩惱の興盛に候にこそ、名残惜しく思えども娑婆の縁つきて、力なくして終るとき、彼の土には参るべきなり、急ぎ参りたき心なきものを殊に憐れみ給うなり。」この御言葉が身に響いてきました。死にたくない、別れたくない、その一人ぼっちの私に、つらいだらう。別れたくないだらう、さびしいだらうと、涙をもつて親鸞聖人の御言葉が響いてくる。この時に、自分の気持を本当に知つて下さる聖人、親鸞聖人は、こゝ迄お出でと言われぬ、ここまで来て下さる聖人、死にたくない別れたくない一人ぼっちの私をことに憐れみ、聖人自身が私も同じだ

いてよく解つています、もう二三日の命です、注射もいりません。僕はこんなに早く死ぬとは知らなんだ、他人の病気を治そうと思つて自分の死ぬことを知らなんだと、これが今なお心に残る友達の声であります。

それと共に医師はよくなることばかり願つて居るが、よくならぬ人はどうするのか、これが私の大きな課題でありました。もうこれ以上は、といつて匙を投げる、医師はそれで済みませんが、患者に死の問題は大きく残ります。

然も問題は残りましても私共は死を空想で想像は出来ても、死を本当に知ることはできないのであります。自分の死を感じられないことについて、私が三十四才の時に肺浸潤になり二年休みましたが、鉄筋コンクリートにもヒビがはいるんだなと思えませんが、四十四才の時に狭心症の発作が続き入院しましたが、ヒビの入つた茶碗が大切にすれば長持ちすると言われて、ヒビの入つた茶碗を大切にしようと思ひまして、外の仕事も全部やめて小さい家に籠つて小さい雑誌を発行してきたのであります。雑誌ならペンは持てる。本は読めるので、こういう生活に入りましてどうにかこうにか病身を護つてきたのであります。所がこういう病気になりましても自分が死ぬとは思えない、長持ちすることはばかりにかかつて居る、まだ死にやしないんだと、その心がいつもありました。さて、六十五才になつた

よと、こうした私に他力の悲願はかくの如きのわれ等が為と、死にたくない私の為に御本願があるのであると、このことが身に泌みました時に、思はず念仏が自然に出てくる。そして、始めて、「死もまたわれなり」と、死を受け取つてつばやきました。今迄は口では死ぬと言つても、まだ死にやしないと、こゝに腰を下して居ました。歎異鈔の九章が身にしみ始めて死もまたわれなりと心に響きました。

清沢満之先生は、我々は生と死を併せ持つて居る、裏と表である、生のない死もなく、死のない生もない、だから生死を超えるということが仏教の要になるのだと、理屈では生死は裏表だと言つてが実際に死を拒否して居る。そこに死もまた我れなりと、そのいやな死を受取る事ができるのは、私にどこ／＼迄も御一緒して下さい力強い御方がある。始めて受取れる。又死もまた我れなりと受取る時に、死の闇が破れて、御浄土の道が開けてくる。死から逃げている時はそれが見えてこない、死を受取る時に生死を超えた光りが内に届いてくる。私自身はこれを通して病も亦、善知識であると思つ。永観律師の言葉に「自分が弱かつた為に、仏教学者にならずに仏法者になれた。これは病気の御蔭だ。病気もまた善知識である」この律師の言葉を私自身も仰いで、死もまた我れなりと。しかもそれは自分がそくなれたのでなく、蓮如上人の御歌に「一人でも行かねば

ならぬ旅なるを、弥陀に引かれて行くぞうれしき」と、一人でも行かねばならぬ旅に弥陀仏に引かれて行く、御一緒して手を引いて下さる御方があれば、墓場はこわいが親に連れて行かれればこわくない、死は一番いやですが、いやな死を弥陀に引かれて行く時に、死もまた我れなりと受け取って行ける。こゝに良寛さんが「災難にあう時はあうが宜敷候、死ぬ時は死ぬが宜敷候」良寛さんの心境も又味わうことが出来るのであります。生死の海を手を引かれて行く、こういうことについて今思うのですが、大分県で、胃癌で亡くなられた医師安波先生は、始め近角先生の教えを聞かれて、善悪はどうか越えられるようになったが、死の問題は一向に自分の問題にならない。妹さんが死んだ時に始めて自分の死が問題になって、篤信な和才さんの導きを受けて解決出来たのです。どこ迄も御見捨ない方があれば死は越えてゆけるじゃないかと、どこ迄も御見捨てない仏があることが御浄土がある証拠じゃないかと。自分達は障子の向うも判らないが、どこ迄も御一緒して下さる阿弥陀様に手をとられる、それが死を越える道である。これが安波先生の心に非常に響いて死の解決が始めて開かれました。その後、胃癌で死なれる時に、自分は死ぬ時に平気でいけるとか落着いていけるとか、そうじゃない、突然九州大学で死の宣告を受けた時に本を見ても読めなかった、心

不十分な御話でしたがこれで失礼させて頂きます。

以上で花田先生の御法話は終り、それからの坐談会での御話を記します。

言葉の有ることの有難さが病氣をして始めて解りました。動けなくなっても言葉の有る御蔭で昔の人とも会えるし、未来の人とも会えるのです。又ドイツ人にもフランス人にも言葉が有れば通じる。時と処を越えて通じるのは言葉の御蔭であります。もし親鸞聖人とその時代にお会いできて、九十年たてば亡くなる。御釈迦様も八十年たつと消えて亡くなる。言葉は時と処を越えて働く。これから思うと我々の働きは小さいものぢやないか、こゝに言葉を始めて拝む気持ちをお教えされました。そして如来は名号を以って救われる。成程、言葉は時間空間を越えて働く広い世界である、この名号を選ばれたということは、ほんとに有難いことだと非常に感じました。言葉が無ければ我々は人に触れようがない、御名号が有る御蔭で仏様にお会いできるのであります。自分が悟りを開いて仏になれば仏に会えるでしょうが、それは泥人形をどんなに洗っても泥ばかりのように、煩惱の始末がつかず、悟れないのです。こうした私に向うから御相手下さる、呼びかけて下さる、然もそれが

がウロ／＼したが、やがて御念仏に引戻されて、そこから落着きも得られた、だからいよ／＼となるどビクづく、ビクづいて死にたくない者を、どこ迄も御見捨てないのが仏の慈悲なんだと。これによって、如何なる死にさまにならうと用事はなくなる。源通寺さんの歌にも

宿業でたとえほけても狂うても呆れ給はぬ弥陀の本願
だから死の覚悟もいらなくなる。

白杵祖山先生の御歌に

覚悟だに要なき迄に御仏の育て給いし御慈悲尊し

この御歌を作られたのは先生が直腸癌になって、現在愛知癌センター総長の今永先生が最後の診察をされたそうです。その先生が手術しますかと聞かれたら、これ以上、人に迷惑かけたくない、このまま死なして貰うと死の宣告を受取られた時に此の歌を詠まれたのです。も一つの歌に

○ 障り無く凡てを照すみ光りは障りある身の上こそ照る

これは白杵先生の病中の御味わいであります。色々な障りを除けての無碍の光りでなく、障りが多いから無碍の光りがある。親は子故にこそ苦勞するのであります、単に無碍の光りがあるのじゃなくて、私が障りだらけだからであります。一番大切なのは、死にたくない別れたくない私を、殊に憐んで下さる、かねてしろしめして殊に憐んで下さるのです。

命をかけて御呼び下さる。これが御念仏即ち南無阿弥陀仏であります。

これを鮮かに教えられましたのは、愛知県のある寺でした、奥さんが腎臓病で岡崎の市民病院に入院して居られた、尿毒症を併発して頭が思うにまかせぬ。その折りに娘婿さんが来られて、御母さんが名古屋へ連れて行けと言うが動かしたら危ないので是非見舞いに来て下さい、とのことでお伺いすると、重態で命いくばくもないようです、そして言われるには、私は寺の生れで朝晩如来様に御給仕していた、有難い本も沢山読んだ、御法話も色々聞いたけれども、今尿毒症になってから何も忘れて了っている。聞いたことも読んだことも皆消えて白紙になって、仏様さえも有るか無いか解らなくなりました、ここを聞かせて下さいと言われる。私は枕元にゆき、坐っていると、奥さんは小さい声でナムアマミダブツ／＼と称えていられる。私はびつくりして、奥さん念仏が出るじゃありませんか、その念仏が仏様です。それ除けて仏様に会う場所は無い、向うから呼んで下さる御声です。と申しましたらそれが非常に心に届いて宿善が熟していたのでしよう、やがて喜びの涙に変わって南無阿弥陀仏／＼、唯御礼ばかり。これが奥さんの最後の御縁でした。御念仏が仏様である、我々御念仏除けてどこにも仏様に会えないのだと、向うから流れて下さる、

名号とは御名の叫び、向うから叫び出て下さる。

島根県の教育者で校長をしていられた川上清吉という方が、沢山の子供を亡くされました。始めのうちには、病気は軽いのだ、しつかりせよとはげます、最後に言葉が通じなくなってしまうと、御父さん此処に居るよ、判るか、お母さんもいる、判るか、と、自分が自分を御父さんが御母さんが此処に居る、わかるかい、と叫んだ。親が子を抱いて、御父さん判るかい御母さん判るかいと、これより外なかったと。今御念仏となって如来が呼びかけて下さる、この心を沢山の子を亡くして非常に感じたと申されました。名号仏事を為す、御念仏が働いて下さる、口にだに御念仏を絶えさなければ信心の花は自然に開くという歌がありますが、こゝに御念仏のいわれを説かれた本願を聞き、御念仏さして頂く、ここに名号が働いて下さる。諸仏如来は言葉を以って救われる。私は病気をして言葉ということが非常に有難く、あらためて知らされました。

質問者の声として、
先生、南無阿弥陀仏の南無は、仏の方についているのですか、私の方からの南無ですか？

先生、教行信証に、「南無とは帰命なり、帰命というは、如来招喚の勅命なり」とある。「頼ませて、頼まれ給う弥陀なれば、頼む心もわれと起らず」、たのめと向うが言われ

念 仏 詩 抄

おちかい

香師 香樹院徳龍師

香師おおせに
口に称うる念仏が
如来様の下さるる
おちかいなり―”

おちかいが
あらわれたまい
今ここに
ナムアマミダブツと
呼びかけまつる

ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ

それを聞いて、しからば御助け候え、とそれに信順する、南無は仏様の勅命である。私此頃、人間の言葉ということと、仏の声ということと、別けて味っています。如来の声、然もそれは向うから呼びかける声、南無とは帰命、たのむとはたのめと言われるま、が向うの親心、そこに如来の勅命がある、それを我々は頂くばかり、こういうことが南無の心です。

質問者 どうも有難うございました。

右の質問が終つて、一応今年の池山先生第四十四回の追憶会は終りに近づきました。これから例年の通りの手作りの精進料理を卓を並べて約三四十人の法友達と食事を共にして夕方近く散会となりました。毎年思うことは、一期一会ではあるが、来年もこの会に会いたいものであると、そんなことが心に浮かぶのであります。南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。



木 村 無 相

ナムアマミダブツ

ただタノムべきは

ある人
後生ということ
存じませぬ―”
と申上げたれば
香師おおせに
それ知らるるまで
容易でない―”

知ったつもりでいたけれど
まるきり知らぬわが身と
知らされ
ただタノムべきは

如来ばかり——
ただタノムべきは
如来ばかり——

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

如来聖人のおたべもの

香師おおせに
如来聖人の
おたべものは
皆が称える念仏なり”

ただ念仏は
わたしのイノチ
これなくしては
生きられぬ——
これまた如来の
オイノチとは——

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ヒトリギメでは

香師おおせに
”お慈悲もきこえず
喜ばれもせず
ご教化も不都合なムネで
これでも助かると
ヒトリギメしているが
ハカライじや——”

ヒトリギめでは
キマリがつかぬ
キメタはしから
すぐこわれ——
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

これまた聖人の
オイノチとは——

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ただ称えるばかり

香師おおせに
”ただ称えるばかりで助かる
ことを聞くのじやほどに”

『歎異抄』に
”ただ念仏してミダに
助けられまいらすべし”
と——

ただ称えるばかり
ただ称えるばかり
そのお心が
なかなか聞こえぬ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

今死んでも

香師おおせに
”死ぬまい
死ぬまいと
思っているうちに
みな死ぬる——”

死ぬる
死ぬる
みな死ぬる
老いも若きも
みな死ぬる——
今死んでも
生甲斐あったか——

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

あとがき

初夏の陽光が眼にしみる頃となりました。皆様の御無事を祈念申し上げます。

皆様から一方ならぬ御心配をいただきました私の宿痾も半年振りに四月の末退院、あとは通院となりました。何とお礼申上げてよろしいやら、入院中はベンも執らず、御無礼のしつ放しで申しわけありませんでした。今度の病で身体老化を改めて知らされました。体力の恢復も遅々としておりますので講話も休ませていただきます。

○
近角先生の御教は「求道」から頂きました。清水様の求道の様子を詳しくお述べ下さり、同信の友の出られることを願っていられますにつけ、お念仏の催促をいただきました。

白井先生の聞信雑録は、先生がよき師、よき友を縁とされて、信の旅を進めていられます

すことをそのままに誌されたものであります。ことに開法の上の要処々々をかかけて下さいました、御味読を願います。

井上様は安城市の山本博雄様宅での聞信会創立五十年の記念に出講されて、多田師の徳風をたたえて下さいました。

西元様は、第十八願の「唯除」の一句をあらためて信証されてのお示しを頂きました。とかく十八願文の中の唯除のところは軽く読み流し易いのでありますが、聖人は必ずこの語を大切に記されましたことも思い併せました。

神原様の一道会の記は、懇切にお書き頂きましたが、私の言葉の粗雑さで御迷惑おかけしたことに慚愧しております。福島先生のお話そのまま立派な文章になっていたことも思い出しました。

木村さんは本年冬は無事にすごされ何よりであります。お手紙に常病無相とありますので、私は蘇生坊と書いてお返事しております。

○
あらためて執筆下さる方々の住所録をしるします。何かお尋ねがありましたら直接におし下さるようになります。

- ⑥六一五 京都市西京区山田開町浄住寺 神原 徳章
- ⑥六〇五 京都市東山区今熊野日吉町四八―三九 川畑 愛義
- ⑥六〇六 京都市左京区下鴨蓼倉町六八―一 西元 宗助
- ⑥六五七 神戸市灘区篠原北町三ノ九ノ二七 井上善右エ門
- ⑥九一五 武生市瓜生町 和上苑内 木村 無相
- ⑥七〇〇 岡山市津島三ノ三ノ一 山田 宰

定 価	半年 八〇〇円(送共)
	一年 一六〇〇円(送共)
編 集・発行人	名古屋市南区駆上町 二ノ八八 花田 正夫
電 話	八二―一〇七〇三七番 愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印 刷 人	坂部 光雄 名古屋市南区駆上町 二ノ八八
発 行 所	慈 光 社
振替口座	名古屋一〇四七〇番
郵便番号	四 五 七